

日本語非専攻学習者のビリーフ調査 —台湾の大学生を対象に—

陳 明涓

要 旨

本調査は、台湾の日本語非専攻学習者を対象とし、Horwitz (1987) の質問紙手法を参考に、広範囲に渡るデータを通して学習者のビリーフを探ったものである。分析の結果、日本語非専攻学習者のビリーフには (1) 外国語学習には努力しても変えられない限界があると考え、(2) 外国語学習は他の理論性科目と異なり、外国語学習ならではの方法がある、(3) 外国語学習の通説に囚われることなく、楽観的だ、(4) 日本語を学習する場合、反復練習と音声によるインプットが重要だと信じている、(5) コミュニケーション志向が高い、(6) 定期的なテストや教科書が必要だと考え、伝統的な学習方法を好む、(7) 学習歴 1 年以上の学習者のほうが正確さに関心を持つ、七つの傾向があることを明らかにした。また、学習歴によるビリーフの違いも観察され、ビリーフの変異性を窺うことができる。広範囲に渡るデータから得られた本調査の結果は客観性があり、台湾の日本語非専攻学習者への教授方法や内容の調整、ないし研究の一つの礎になるのではと考えられる。

【キーワード】日本語非専攻学習者、ビリーフ、学習歴、台湾の大学生

1. はじめに

国際交流基金「2009 年海外日本語教育機関調査」によると、台湾はオーストラリア、韓国に続き、人口比例における日本語学習者数が高い。247,641 人の日本語学習者中、48.4%の学習者は高等教育機関で日本語を学んでいる。そして、日本語を専攻している学習者数と非専攻学習者数の比は約 1 対 5 で、非専攻学習者のほうが多い。

学術的な根拠はないが、この日本語主専攻学習者と非専攻学習者の同質性への疑問は、筆者自身感じており、教師仲間からもよく言われることである。また、学習効果の差もしばしば話題に上る。確かに両者には、学習環境や授業時間など外的な条件の違いが見られる。しかし、筆者たちが感じた違和感は学習者そのものに関係しているような気がする。そもそも主専攻学習者と非専攻学習者は違う学習方法を好み、言語学習に対する考えも異なるのではないかという疑問を持つようになった。

この疑問の解明は非専攻学習者の学習効果向上に繋がると考え、筆者はまず学習者の学習に影響する内面的な要因の一つであるビリーフから調査を行った。学習者ビリーフ (Beliefs) とは学習者が言語学習に対して意識的・無意識的に抱いている態度や意識である (板井, 2000:70)。Horwitz (1987) はビリーフの質問紙 BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) を作成し、32 名の ESL 学習者を対象に調査を行った。その結果、ビリーフによって、授業活動への取り組みに違いがあることが分かり、教授法が学習者ビリーフと衝突すると学習効果に影響すると提言した。台湾の日本語非専攻学習者も教授法とビリーフが衝突して、学習効果の不振を引き起こしている可能性がある。それを確かめるため、台湾の日本語学習者を対象に広範囲のビリーフ調査を実施した¹。本調査はその一部で、日本語非専攻学習者に関する結果報告である。

2. 先行研究

2.1 国別の学習者を対象にした研究

ビリーフの研究で最もよく言及されている先行研究は、先述した Horwitz (1987) の研究である。Horwitz (1987) がビリーフと教授法や学習効果との関係を示した後、その質問紙を基に多くの研究者が日本語学習者のビリーフに関する研究結果を発表した。その中に学習者の出身国に注目し、学習者のビリーフ特徴を明らかにすることを目標にした研究がある。板井 (1997) は中国の日本語学習者を調査した。その結果によると、中国の学習者は暗記、大量反復練習及び文法積み上げ方式の学習を支持して

いる。クラス活動に意欲的であり、教師以外の学習方法も知っている。若井・岩澤（2004）はハンガリー人学習者を対象に調査を行った。ハンガリー人学習者は教師の指示に従うことが目標達成への近道と考える傾向があり、文の型など狭い範囲での正しさを重視し、間違いを恐れているという傾向があると述べた。高崎（2006）は、フィリピンの学習者は会った日本人と日本語で話すことを好むが、教師の指導を離れた学習法にはあまり積極的ではないと報告した。また、和田（2007）の調査では、スリランカの日本語学習者はコミュニケーション能力向上のための教授法や教室活動を望み、教師依存の傾向が強いと述べた。上述した研究のいずれも一つの国の学習者を対象にしているが、それぞれが提示した結果を通して、一口に日本語学習者と言っても、国別の学習者には異なるピリーフ特徴があることが分かる。

2.2 学習者ピリーフと専攻/学年の関係

国別に調査を行い、その国の学習者ピリーフ特徴を提示することに止まらず、学習者のピリーフを更に学習者の属性（専攻/学年）で分析を行った研究もある。板井（1999）は香港城市大学で日本語を副専攻とする学習者を対象に分析したが、その中に上海復旦大学の日本語専攻学習者を対象に行った板井（1997）の調査結果と比較する部分がある。板井（1999）の結果によると、両者の間で最も目立った違いは「教師の役目と自律学習」の領域である。主専攻学習者は自律性が高いのに対し、非専攻学習者は教師がクラスの主導権を取ることを期待している。その理由について、板井は主専攻の学習者は学習過程を自己管理できる学習環境にある故、自律性が高く、教師への依存も弱いと述べた（板井，1999:171）。その後、関崎（2009）は中央民族大学の日本語専攻学習者を対象にした自分の調査と板井（1999）と比較し、板井と同様日本語専攻学習者のほうが自律的であることを報告した。

板井（1999）と関崎（2009）は学習者ピリーフの学年差についても分析を行った。板井（1999）は学年による違いが確認できなかったと述べると同時に、「学習者の関心が情意面での反応から実際の日本語運用の方向へ移行している（板井，1999:174）」と学年によるピリーフへの注目度に違いがあると報告した。そして、低学年の学習者から教師や教授法へのマイナスの情意反応が見られる理由として、板井は副専攻の学習者が学習期間の短さに不安を感じ

ているからだと説明した。一方、主専攻学習者を対象にした関崎（2009）の研究では学年差が観察された。低学年の学習者は文法より語彙を重視するが、高学年になるにつれ語彙より文法を重視する傾向があると報告した。また、「初級段階での日本語の誤用が許されるとしたら後で日本語を正確に話すことが難しくなる」という質問項目の答えに対して、学年が上がるにつれ賛成の割合が減っているという結果を提示した。板井（1999）と関崎（2009）の研究は同じ国の日本語学習者は専攻や学年によって、違うピリーフを持っている可能性があることを示した。

2.3 台湾の日本語学習者を対象にした研究

台湾の日本語学習者を対象にしたピリーフ研究に服部（2002）、盧（2011）、陳（2014）がある。服部（2002）は台湾大学の学生 121 名を対象に調査し、以下のピリーフ特徴を挙げた。①授業よりも自然習得的な方法のほうが効果があると思われる；②外国語の授業への期待はいろいろな知識を得ること；③発音の正確さを大切に思い、翻訳をやや重視する傾向がある；④繰り返し練習や単純な練習に対しては忍耐強さが見られる（服部，2002:179）。

その後、盧（2011）は台湾の 9 校の日本語専攻学習者（計 472 名）を対象に調査を行い、次の傾向があると述べた。①初期段階の正しさを重視；②反復練習と暗記のような伝統的な学習方法を支持している；③学習する際、語彙、翻訳、文法の順に重視している；④四技能の中「話す」技能が最も難しいと感じる；⑤日本語は中難度の言語だと思う；⑥教師主導の授業に慣れ、教師依存の傾向が見られる；⑦最初の日本語の先生が大きな影響を与えている；⑧媒介語（母語）が必要；⑨コミュニケーションな教室活動を望む；⑩文化は言語の背景にあると捉えている（盧，2011:103）。一方、陳（2014）は日本語非専攻学習者 360 名を対象に調査を行い、学習者の特徴を次の三つにまとめた。①日本語学習に対して楽観的である；②繰り返しの練習と発音の正確さを重んじている；③目立った教師依存が見られない（陳，2014:14-15）。

台湾の学習者を対象にした三つの調査は使用した質問紙が異なり、項目選出する時の判断基準も違う（服部と陳は賛成派率²で傾向を見ているのに対して、盧は平均値で判断している³）。しかし、繰り返しの練習方法への賛同、初期段階の正しさと正確な発音への拘りが複数の研究結果に指摘されている

ことから、これらは台湾の日本語学習者の重要なビリーフ特徴と判断できる。しかし、教師依存に関する点では相反した結果がそれぞれ報告されている。主専攻学習者は教師依存の傾向が見られる（盧，2011）が、非専攻学習者には目立った教師依存がない（陳，2014）。台湾の日本語主専攻学習者と非専攻学習者の間に共通したビリーフ特徴を持つと同時に異なる部分もあるという可能性を示した。

以上、先行研究を国別の学習者に関する研究、ビリーフと専攻/学年の関係と台湾の学習者を対象にした研究に分けて述べた。国別の学習者を対象にした研究を通して、学習者は国によるビリーフ特徴があることが分かる。先行研究はその特徴を明らかにし、学習方法を考慮することで学習効果の向上に繋がると考える。同様の考え方は非専攻学習者にも適用できる。非専攻学習者のビリーフ特徴を明らかにすれば、学習者の学習に提言でき、学習効果にも繋がると考えられる。

3. 研究目的と課題

3.1 研究目的

日本国内と違い、海外の日本語教室の学習者は均質性が高い。その特徴に合わせて授業を行えば、学習者の動機や学習効果を向上させることが可能である。その際、国別の学習者を対象にした調査結果が参考になる。しかし、先行研究が明らかにしたように、同じ国の学習者のビリーフは専攻や学年により異なる可能性がある（板井，1999；関崎，2009）。つまり、台湾の日本語非専攻学習者の学習に助言をし、学習効果を向上させるには、非専攻学習者のビリーフの特徴と傾向を明らかにする必要がある。そこで、本調査は広範囲に渡る調査を行い、非専攻学習者の学習ビリーフの特徴を取り出すことを試みると同時に学習歴についても分析した。

3.2 研究課題

台湾の日本語非専攻学習者のビリーフを把握するための第一歩と考え、本調査は以下の二つの課題を設定した。

- ① 台湾の日本語非専攻学習者のビリーフにどのような特徴があるか
- ② 台湾の日本語非専攻学習者のビリーフに、学習歴による違いがあるか

一つ目の課題は、非専攻学習者のビリーフの特徴を領域ごとに結果を確認し、その中から賛成寄りと

反対寄りの項目を取り出す。そして、先行研究の結果と合わせながら、非専攻学習者の特徴を見出す。二つ目の課題は、学習歴による変化を確認する。先行研究では学年で学習者を区切るが、それは対象が日本語主専攻学習者の場合のみ適用する。非専攻学習者は主専攻学習者と違い、学年イコール学習歴という関係を持たない。そこで、本調査は学年ではなく、学習歴で分析を行った。

4. 研究対象と方法

4.1 研究対象

日本語非専攻学習者の状況をより正確に把握するため、本調査は対象学校を増やすだけでなく、台湾全体をできるだけ網羅するように試みた。台湾の北部、中部、南部の高等教育機関（大学、科技大学、技術学院などを含む）の協力を得て、日本語を習っている日本語非専攻学習者を対象に、専攻を問わず調査を実施した。そして、12の大学、計575名の日本語非専攻学習者のデータを集めることができた（表1）。表1中、性別部分の合計人数が575に達していないのは、回収した調査紙の中に性別の記入がされていない用紙があったためである。

表1. 学校別の内訳表

学校名	有効人数	性別	
		男性	女性
台湾大学	47	21	24
輔仁大学	55	8	47
淡江大学	62	14	47
東呉大学	19	7	12
銘傳大学	55	5	50
文化大学	65	17	48
世新大学	23	1	22
東海大学	55	20	35
静宜大学	53	9	44
台中科技大学	55	6	49
高雄第一科技大学	37	9	28
高雄餐旅大学	49	8	40
合計	575	125	446

575名中、22%が男性（125人）で、78%が女性（446人）である。一般的に、台湾の語学学科の学生は女性が男性より多い。今回の集計結果から非専攻学習者のクラスにおいても女性が多いことが分かった。

一方、日本語学習歴に関しては図1で示した通り、1年未満の学習者が最も多く全体の60%を占めてい

る。その次が1年から2年未満の学習者（25%）、2年から3年未満の学習者（9%）、3年から4年未満の学習者（4%）の順で、学習歴の長い非専攻学習者が少ないことが分かる。台湾の高等教育機関で日本語を第二外国語として導入する場合、学習期間は通常1年と設定されている。故に今回は1年を区切りに、学習歴による違いを確認する。

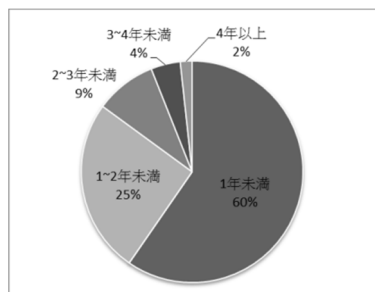


図 1. 日本語学習歴別の割合図

4.2 研究方法

本調査は「2.先行研究」で述べた研究と同様、質問紙形式により調査を行った。質問紙の内容は Horwitz (1987) がデザインした BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) を基本とするが、中国語母語話者を対象に製作した中国語版の質問紙 (板井, 1997; 板井, 1999; 関崎, 2009) の項目も参考した。

Horwitz (1987) の BALLI は「言語学習の適性」、「言語学習の難易度」、「言語学習の本質」、「学習ストラテジーとコミュニケーションストラテジー」、「言語学習の動機」の5つの領域に分けて項目を設定した。板井 (1997, 1999) と関崎 (2009) の中国語 BALLI はそれを基盤とした上、それぞれの調査目的に合わせて項目を増減した。板井 (1997) は「教師への要求」、「媒介語」の領域を増やして、7領域 76項目の質問紙を作成した。しかし、その後の板井 (1999) では「教師への要求」、「媒介語」をそのまま残し、言語学習一般に関する質問「言語学習に対する適性」、「言語学習の難易度」、「言語学習の動機」を削除し、4領域に絞った。関崎 (2009) は板井 (1997, 1999) と同様、学習者と教師との関係に注目し、「教師の役割」と「学習者の自律性」を増やすが、「言語学習の難易度」と「学習ストラテジーとコミュニケーションストラテジー」の領域を削除した。

本調査は上述した先行研究の調査紙を参考に、新しく質問紙を制作した。新しい質問紙は「言語学習の適性」、「日本語学習の本質」と「教室と教師の役割」の三つの領域に分かれている。領域の分類と命名は異なるが、項目内容は主に Horwitz (1987) の BALLI から選出している。「言語学習の適性」は「言語学習の適性」と「言語学習の難易度」の項目から整理した内容で、「日本語学習の本質」の多くは「言語学習の本質」と「学習ストラテジーとコミュニケーションストラテジー」に分類されていた項目である。そして、「教室と教師の役割」の項目は板井 (1997) と関崎 (2009) を参考に制定した。既存の領域と項目を再度「言語学習の適性」と「日本語学習の本質」に分類したのは「言語学習」と「日本語学習」を明確に区別することが目的である。先行研究 (板井, 1999; 関崎, 2009; 盧, 2011; 陳, 2014 など) を見る限り、「言語学習」と「日本語学習」の区別が曖昧であった。一つの領域に言語学習一般に対する質問と日本語学習に対する質問が同時に存在していたり、類似した内容の項目が複数の領域に存在したりしていた。分析の際にもそれが原因で領域の焦点が絞れなくなり、言語学習一般に関するピリーフか、日本語学習に関するピリーフかの判断が難しい。そこで、本調査は言語学習に対する一般的なピリーフを「言語学習の適性」とし、質問項目では「外国語」もしくは「言語」という言葉を使用した。それに対して、「日本語学習の本質」の領域では、学習ストラテジーを含め、日本語学習に関するピリーフをまとめ、質問項目でも必ず「日本語」を使い、対象を明確にした。

一方、「教室と教師の役割」は Horwitz (1987) が提示した領域ではないが、板井 (1997, 1999) と関崎 (2009) の報告から、この部分は専攻と非専攻学習者を比較する上大きなポイントになることが分かった。ただし、この部分の項目はまだ定着されてなく、研究者によって分類が異なる。例えば関崎 (2009) の質問紙には「教師の役割」と「言語学習の自律性」があり、盧 (2011) は「教師の役割」、「媒介語」と「教授法と教室活動」と更に細かく分けた。しかし、領域の細分化は必ずしも調査に有利とは限らない。細分化すると調査項目が増え、調査協力者の負担が大きくなる。また、細分化すると項目の分類が難しくなり、領域の境界線も曖昧になりやすい。以上の考えを基に、本調査は「教室と教師

の役割」の領域を制定し、学習者が日本語教室に求めることや、日本語教師への期待などの項目をこの領域内にまとめた。領域の分類と項目を見直した本調査の質問紙は、調査結果を更に明確に考察することができると思われる。

質問紙の回答は5段階評価尺度を使い、回答者は「5 強く同意する」「4 同意する」「3 どちらでもない」「2 反対する」「1 強く反対する」の中から最も自分の考えに近い段階を選んで記入する。また、質問紙にはビリーフに関する項目のほか、基礎情報（性別、学年、専攻など）に関する質問項目も設けた。調査の実施期間は2015年4月から6月の3ヶ月間で、実施方法は助手を現地に派遣する方法と、用紙を郵送して、その学校の教員に実施してもらう方法の二つをとった。

5. 分析と考察

5.1 質問紙の信頼度

質問紙の信頼性を確認するため、SPSS を使ってクロンバックのアルファ（Cronbach's alpha）を算出した。その結果、クロンバックアルファ値が0.714で、0.7⁴より大きいことから、今回の質問紙は信頼性のある内容であることが確認できた。以下、本調査が設定した二つの課題順に、5.2 全体の傾向、5.3 学習歴差で分析結果を示す。

5.2 全体の傾向

本調査の一つ目の課題は「台湾の日本語非専攻学習者のビリーフにどのような特徴があるか」である。全体の傾向をまず一群の K-S 検定⁵で確認した。その結果、有意性が見られなかったのは「05 日本語の授業で、もし母語を使わなければ、習得がもっと早い」、「19 文系の学生は理系の学生より外国語学習が得意だ」、「25 私の国の人は外国語学習を得意とする」と「29 私は外国語学習が得意だ」の4項目で、その他の項目の回答は平均値が賛成傾向か反対傾向だけではなく、統計的にも意味のある偏りであることが分かった。以下、「言語学習の適性」、「日本語学習の本質」、「教室と教師の役割」の3つの領域に分けて、内容を説明する。

5.2.1 言語学習の適性

表2は「言語学習の適性」の項目を賛成派率⁶の高い順に並べた表⁷である。本調査は服部（2002）と同様、賛成派率が75%を超えた項目を賛成寄りビリーフとし、反対派率が75%を超えた項目を反

対寄りビリーフとした。

表2. 「言語学習の適性」領域の結果

項目内容	賛成派率	平均値
09 ある人は言語学習の才能がある	93.0	4.38
02 外国語の中には学習しやすい言語と学習しにくい言語がある	92.9	4.23
21 外国語を学ぶ時、その国の文化も同時に学ぶべきだ	86.3	4.14
01 子どもは大人より外国語習得が早い	82.1	4.03
06 外国語を学ぶ方法と理論性科目を学ぶ方法は異なる	82.0	4.01
38 外国語学習はその外国語を使用する国へ行くのが一番いい	71.5	3.99
16 外国語を学ぶ時、理解するより話すほうが簡単だ	50.0	3.40
04 すでに一種類の外国語を習得した人にとって言語学習は容易だ	45.3	3.31
12 外国語を学ぶ時、母語話者教師に学んだほうがいい	39.4	3.32
29 私は外国語学習が得意だ	32.9	3.07
19 文系の学生は理系の学生より外国語学習が得意だ	29.6	3.01
25 私の国の人は外国語学習を得意とする	19.1	3.03
34 女性は男性より外国語学習が得意だ	16.5	2.67
22 外国語を学習時、ノンバーバルは学習しなくてもいい	9.7	2.63

この領域の結果で特に目を引くのは「09 ある人は言語学習の才能がある（93%）」と「02 外国語の中には学習しやすい言語と学習しにくい言語がある（92.9%）」の二項目の賛成派率である。90%を超える数値は今回対象にしている日本語非専攻学習者の殆どがこのビリーフを持っていることを意味している。それを「01 子どもは大人より外国語習得が早い（82.1%）」項目の結果と合わせて考えると、台湾の日本語非専攻学習者は外国語学習に対して、努力しても変えられない部分がある（例えば、外国語の難易度は一律ではない、言語学習に対して特に優れた才能を持つ人がいる、言語学習に適している学習時期がある）というビリーフも持っていることが分かる。それ以外、表2で賛成派率が75%以上の項目に「21 外国語を学ぶ時、その国の文化も同時に学ぶべきだ（86.3%）」と「06 外国語を学ぶ方法は理論性科目を学ぶ方法は異なる（82.0%）」がある。非専攻学習者は言語と文化は切り離せないことを認識していて、言語には言語の学習方法がある

と考えていることが分かった。一方、3.1.2 の冒頭で述べたように「19 文系の学生は理系の学生より外国語学習が得意だ」、「25 私の国の人は外国語学習を得意とする」と「29 私は外国語学習が得意だ」の三つの項目は t 検定で有意性が見られなかった。これはこの三項目の学習者の回答が「どちらでもない」の選択肢を中心に正規分布していることを意味している。この結果とすでに述べた賛成寄りのピリーフの結果を合わせて見ると、非専攻学習者は言語学習に対して優れた才能を持つ人がいるということに賛成ではあるが、それが自分を含めた自国の人と考えていない。そして、得意とする分野（文系や理系）で言語学習の能力が異なると考えていないことが分かる。また、「34 女性は男性より外国語学習が得意だ」は台湾でよく耳にする通説の一つである。その項目の賛成派率（16.5%）と平均値（2.67）から見ると、反対寄りの意見が賛成寄りの意見を上回っていることが推測できる。実際、回答の分布を見ると、反対派率が 42.6%で、どちらでもないが 40.9%である。「女性が男性より外国語学習が得意だ」という考えに賛成する学習者が相対的に少ないことが分かった。

今回、「言語学習の適性」で見られた賛成寄りのピリーフは陳（2014）でも同じく賛成寄りとして確認されている。言い換えれば、非専攻学習者は言語学習には学びやすい年齢や、逸出した才能や、学習しやすい言語など、努力しても越えられない、言語学習ならではの限界があることを認めている。しかし、性別と専攻に関しては、年齢や才能のように突出したピリーフ傾向が確認できなかった。もちろん一問で言語学習能力における男女差や、専攻差について論じることはできない。しかし、今回の結果から非専攻学習者は言語学習において、台湾でよく言われている「女性が男性より語学能力がある」と、「文系は理系より語学学習が得意だ」というピリーフを持っていないことが言える。

主専攻学習者との比較に関して、盧（2011）の研究にこの領域の項目がないため、比較することはできないが、服部（2002）では「子どもは大人より外国語習得が早い」と「外国語を学ぶ時、その国の文化も同時に学ぶべきだ」の二項目も賛成寄りのピリーフとして確認されている。更なる検証が必要であるが、この二項目が台湾の日本語学習者全体が持つピリーフである可能性が高い。

5.2.2 日本語学習の本質

「日本語学習の本質」領域で賛成派率が一番高いのは「14 日本語学習では反復練習が最も重要だ」である。96.5%の賛成派率は調査項目の中で最も高い数値で、日本語非専攻学習者の殆どが反復練習が日本語学習にとって重要な方法だと考えていることが分かる。

表 3. 「日本語学習の本質」領域の結果

項目内容	賛成派率	平均値
14 日本語学習では反復練習が最も重要だ	96.5	4.43
03 日本語学習では音声 (MP3/CD) を使った練習方法が重要だ	83.1	4.13
20 日本語学習では発音が最も重要だ	76.9	3.96
24 日本語を学習する時、間違いは早めに直さないと訂正しにくくなる	76.2	3.87
27 日本語学習では単語が最も重要だ	70.4	3.67
15 学習ビデオは日本語学習に役立つ	68.3	3.89
18 日本語学習では母語と日本語間の翻訳が最も重要だ	64.5	3.73
08 日本語学習では読み書きの練習が最も重要だ	53.5	3.48
32 日本語学習では文法が最も重要だ	51.8	3.48
13 日本語は (5)非常に学びやすい (4)学びやすい (3)どちらでもない (2)学びにくい (1)非常に学びにくい	41.7	3.10
26 英語が上手な人は日本語が下手だ	7.8	2.28
23 正確に使えるまで、日本語を話してはいけない	3.1	1.82

それ以外の学習方法で賛成派率が 75%を超えたのは「03 日本語学習では音声 (MP3/CD) を使った練習方法が重要だ (83.1%)」と「20 日本語学習では発音が最も重要だ (76.9%)」と「24 日本語を学習する時、間違いは早めに直さないと訂正しにくくなる (76.2%)」の三項目。「03 日本語学習では音声 (MP3/CD) を使った練習方法が重要だ」の賛成派率が高いのは、耳からの学習を好むと考えられるが、同時にそれは聞く練習が不足しているから重要だと考える可能性もある。しかし、「20 日本語学習では発音が最も重要だ」と合わせて見ると、非専攻学習者の学習は「聞く」と「話す」に重きを置く傾向が

あるとも推測できる。後に説明する「5.2.3 教室と教師の役割」の部分に「07 日本語を学習する場合、会話をメインとしたカリキュラムが良い」の項目がある。その賛成派率が78.8%であることと合わせて考えると、日本語学習に関して、非専攻学習者はコミュニケーションできることを期待している。一方、「24 日本語を学習する時、間違いは早めに直さないと訂正しにくくなる」の結果から、学習者は正確さを重視していて、間違いの早期訂正を期待していることも分かる。

また、この領域には反対寄りのピリーフが一つあった。「23 正確に使えるまで、日本語を話してはいけない」項目の反対派率は75%を超えて、87.8%である。これは一見「24 日本語を学習する時、間違いは早めに直さないと訂正しにくくなる」の正確さを重視するという結果と相反しているように見える。しかし、項目24は間違い訂正の容易度から見たもので、項目23はコミュニケーションする際、正確さへの拘りである。つまり、コミュニケーションに関して、非専攻学習者は正確さより話すことが重要だと考え、日本語を使ってコミュニケーションすることに積極的だと言える。

この領域の賛成寄りピリーフは「言語学習の適性」領域と同様、陳(2014)でも確認されている。唯一異なっているのは「23 正確に使えるまで、日本語を話してはいけない」項目の回答結果であった。陳(2014)の結果では賛成派が反対派を上回っている。それに関して、陳は非専攻学習者が正確さを重視するあまり実際の使用が消極的になったと分析すると同時に、調査範囲が一学校であるため、その学校の特徴という可能性もあると述べた。そして、今回の調査で違う傾向が示されたことから、一学校の調査の危険性が再度認識させられた。

一方、主専攻学習者の先行研究(服部, 2002; 盧, 2011)にも同じ傾向が報告されていた(例えば初期段階の正しさへの拘りや発音への重視など)。学習者の学習経験は学習方法に関するピリーフに強く影響しているが分かる。

5.2.3 教室と教師の役割

「11 日本語学習には先生が必要だ(87.1%)」、「10 先生の定期的なテストは日本語学習に役立つ(87.1%)」、「31 日本語学習には教科書が必要だ(80.4%)」の三項目から、日本語非専攻学習者は教師の存在を必要とし、教科書、テストを重要と考

える伝統的な授業方法を期待していることが分かる。伝統的な授業方法を求める傾向は学習者が今まで受けてきた教育経験によるものと思われる。台湾の教育では受験に重きを置く傾向がある。中学校の時は高校受験、高校の時は大学受験がある。学校でも塾でも先生が教壇に立って、一方的に教える授業方法が多い。その経験がそのままピリーフになるのは自然な結果である。陳(2014)も類似した傾向が報告されている。

表4. 「教室と教師の役割」領域の結果

項目内容	賛成派率	平均値
17 自分で間違いを検証するのは日本語学習に役立つ	88.5	4.11
11 日本語学習には先生が必要だ	87.1	4.13
10 先生の定期的なテストは日本語学習に役立つ	80.4	4.02
31 日本語学習には教科書が必要だ	80.0	3.95
07 日本語を学習する場合、会話をメインとしたカリキュラムが良い	78.8	3.98
30 日本語を学習する時、先生による文法説明が最も有効な方法だ	72.5	3.84
28 日本語の授業でペアで練習するのは学習に役立つ	65.9	3.74
33 分からない単語に出会った時、推測してもいい	45.1	3.26
35 私には自分なりの日本語学習方法がある	44.5	3.36
37 日本語を学習する時、教師が主導すべきだ	39.9	3.30
05 日本語の授業で、もし母語を使わなければ、習得がもっと早い	34.2	3.05
36 授業でクラスメートと日本語で練習しても意味がない	3.0	1.87

しかし、この領域で最も高い賛成派率88.5%を有しているのは「17 自分で間違いを検証するのは日本語学習に役立つ」である。また、「37 日本語を学習する時、教師が主導すべきだ」の賛成派率が39.9%しかないことから、学習者は教師の完全主導を求めていることも分かる。学習者が一貫性のない矛盾したピリーフを持っていることは Horwitz (1987)でも指摘されている。今回の場合、学習者の教育経験がその一因であると筆者は考える。今までの学習成功経験から学習方法に対する信頼がある一方、疑問もしくは自立心が芽生え、それが一貫性のない矛盾が生じたと考えられる。

更に、表4の中、上述した項目以外で賛成派率が75%を超えている項目に「07 日本語を学習する

場合、会話をメインとしたカリキュラムが良い (78.8%)」がある。「日本語学習の本質」領域で、非専攻学習者が「聞く」と「話す」に重きを置きたがる傾向があることを確認した。「07 日本語を学習する場合、会話をメインとしたカリキュラムが良い」の結果はその傾向を再度確認したと言える。しかし、台湾の日本語非専攻学習者のクラスは第二外国語という位置づけが最も多く、五十音から始まる初級クラスが多い。それにもかかわらず、学習者は会話をメインとしたカリキュラムを期待する。これでは能力と学習者の期待のギャップが大きすぎる。実用性に重きを置く非専攻学習者のこのビリーフが、教師が授業で感じた違和感の原因の一つではないかと筆者は考える。

この部分の結果と主専攻学習者を対象にした盧 (2011) の結果と比較すると、主専攻も非専攻も「学習には教師が必要だ」と「教師による定期的なテストは日本語学習に役立つ」に対して賛成寄りの意見を持っていることが分かる。しかし、盧 (2011) は、主専攻学習者は「日本語の間違いは教師が直すべきだ」や「教師に自分の学習上の問題点や困難な点を教えてほしい」の賛成派率が 90%以上と高く、教師依存の傾向があると指摘したのに対して、今回の調査では教師依存と判断するまでの内容が見られなかった。そして、もう一つの違いは、主専攻学習者は「日本語の授業で、もし母語を使わなければ、習得がもっと早い」に対して賛成寄りであった (盧, 2011:95) が、今回の調査は「どちらでもない」と回答した人が最も多く、t 検定にも有意性が見られなかった。前述したように、非専攻学習者の授業は五十音から始まる教室が多い。そのため、日本語を使った授業を経験したことがなく、「どちらでもない」としか答えようがないという可能性もある。いずれにしても今回の結果から非専攻学習者は教師がクラスで日本語を使って授業すること自分の学習結果に関連性があると考えの人が少ないことが分かった。

以上が今回のデータを通して確認できた日本語非専攻学習者ビリーフの全体傾向である。先行研究 (服部, 2002; 盧, 2011; 陳, 2014) と項目が異なりため、比較可能な部分のみ比較を行った。その結果、非専攻学習者のビリーフの中で、日本語主専攻学習者と同じ傾向の部分と異なる傾向の部分がそれぞれあることが確認できた。

5.3 学習歴差

Horwitz (1987) はビリーフの可変性を主張しているが、今までの多くの研究では、学年による変化を明確な証拠で説明することができなかった。今回の調査もそれについての分析を試みた。また、非日本語専攻学習者の場合、学年と学習歴が一致しない可能性が高いため、今回の調査は学年ではなく、学習歴から分析を行った。

前述したように台湾の高等教育機関の場合、日本語非専攻学習者の授業の多くは第二外国語として開講されていて、期間は一学年である。その現実を念頭に、今回のデータを日本語学習歴が 1 年未満の学習者 (計 347 人) と 1 年以上の学習者 (計 235 人) に分け、ビリーフの差について検証した。5%水準 ($\alpha=0.05$ $p<0.025$) で t 検定を実施した結果、両群は 7 項目 (表 5) に有意差が確認できた。表 5 の 7 項目の中には「学習歴 1 年未満の学習者のほうが賛成している項目」と、「学習歴 1 年以上の学習者のほうが賛成している項目」がある。今回の t 検定は 1 年未満の平均値から 1 年以上の平均値を引くため、平均差の数値がプラスの場合は「1 年未満のほうが賛成している項目」で、逆に平均差の数値がマイナスの場合は「1 年以上のほうが賛成している項目」になる。

表 5. 学習歴 1 年未満と 1 年以上の t 検定結果

項目内容	平均差	顕著性
33 分からない単語に出会った時、推測してもいい	0.34	0.000
29 私は外国語学習が得意だ	0.25	0.002
35 私には自分なりの日本語学習方法がある	0.19	0.006
21 外国語を学ぶ時、その国の文化も同時に学ぶべきだ	0.16	0.007
20 日本語学習では発音が最も重要だ	-0.15	0.023
19 文系の学生は理系の学生より外国語学習が得意だ	-0.20	0.015
16 外国語を学ぶ時、理解するより話すほうが簡単だ	-0.24	0.005

表 5 の項目の中、上の 4 項目は学習歴 1 年未満の学習者のほうがより賛成している項目である。「23 分からない単語に出会った時、推測してもいい (0.34)」; 「29 私は外国語学習が得意だ (0.25)」; 「35 私には自分なりの日本語学習方法がある (0.19)」; 「21 外国語を学ぶ時、その国の文化

も同時に学ぶべきだ (0.16)」。一方、「20 日本語学習では発音が最も重要だ (-0.15)」、「19 文系の学生は理系の学生より外国語学習が得意だ (-0.20)」と「16 外国語を学ぶ時、理解するより話すほうが簡単だ (-0.24)」の 3 項目は学習歴 1 年以上の学習者のほうがより賛成している。

まず、学習歴 1 年未満の学習者の部分を見てみる。学習歴 1 年未満の学習者は自分には自分なりの日本語学習方法があり、外国語学習も得意だと考えている。日本語学習に対する自信が窺える。日本語非専攻学習者の学習動機の中、学習者から最もよく聞かれるのが「ポップカルチャー (マンガ、アニメ、J-POP など)」。今まで日本語を習ったことがないが、日本の歌を歌ったり、ゲームを遊んだり、アニメを見たりしてきた。日本と日本語をもっと知りたいから日本語を選択したが、習う前から日本に関するものを楽しんでいた。そのような経験が自分は自分なりの方法を持ち、外国語学習が得意だという考えに繋がったと思われる。これは陳 (2014) で提示した「非専攻学習者が日本語学習に対して楽観的だ」という結果と類似している。一方、学習歴 1 年以上の学習者のほうが「16 外国語を学ぶ時、話すのは理解するより簡単だ (-0.24)」という項目に賛成していることは、日本語を習い続けて、話す能力が身に付いたと推測できる。そして、「20 日本語学習では発音が最も重要だ (-0.15)」と「33 分からない単語に出会った時、推測してもいい (0.34)」の結果から、1 年以上の学習者たちは、発音は重要だと考え、正確さを求める人が多いことが分かる。

学習歴 (学年⁸) 差について、板井 (1999) は、本研究の研究対象と異なり、少なくとも三学年を続けて学習する必要がある日本語副専攻者の分析結果ではあるが、やはり学習期間が長くなるにつれ、運用方面への注目が高くなるという結果を示している。板井 (1999) の学習者が反復練習や積み上げ学習などを重要視するようになり、疑問点をはっきりさせたいと考えるようになったことも、本調査のデータで学習歴 1 年以上の学習者のほうが正確さに関心を持つことも、同じ言語運用への関心が高まったことを示した結果と考えられる。

6. 終わりに

台湾の 12 の大学、計 575 名の日本語非専攻学習者のデータを通して、日本語非専攻学習者のビリー

フを分析した。その結果、台湾の非専攻学習者に以下のようなビリーフ傾向があることが分かる。

- (1) 外国語学習には努力しても変えられない限界があると考え
- (2) 外国語学習は他の理論性科目と異なり、外国語学習ならではの方法がある
- (3) 外国語学習の通説に囚われることなく、楽観的だ
- (4) 日本語を学習する場合、反復練習と音声によるインプットが重要だと信じている
- (5) コミュニケーション志向が高い
- (6) 定期的なテストや教科書が必要だと考え、伝統的な学習方法を好む
- (7) 学習歴 1 年以上の学習者のほうが正確さに関心を持つ

(1) から (6) は研究課題①「台湾の日本語非専攻学習者のビリーフにどのような特徴があるか」による結果で、(7) は研究課題②「台湾の日本語非専攻学習者のビリーフに、学習歴による違いがあるか」の分析結果である。全体のビリーフ像に関して、日本語非専攻学習者と主専攻学習者のビリーフには共通している部分があることが分かった。例えば「伝統的な学習方法を好む」、「反復練習と音声によるインプットが日本語学習に重要だと信じている」。共通のビリーフが学習方法に関する内容に集中しているのは、同じ国の学習者が同じ教育体系の中で学び、類似した学習経験をしてきたからだと考えられる。一方、両者の間に違う傾向のビリーフが存在することも確認できた。例えば非専攻学習者は主専攻学習者のような強い教師依存がない。そして、日本語学習をする時、コミュニケーション志向が高い。筆者は教師たちが感じた違和感は、このような主専攻学習者と非専攻学習者のビリーフの違いによるものと推測している。そして、学習歴の分析に関して学び始めの学習者は学習に対する自信が見られ、個別の事象より全体のほうに関心があることが分かった。それに対して、1 年以上の学習者は正確さをより強調している。

本調査は非専攻学習者と主専攻学習者が異なるビリーフを持っていることを明らかにした。しかし、本調査と比較している先行研究は項目や用語に違いがあり、基準も異なる。ビリーフの中、どれが全学習者に共通するビリーフか、どれが非専攻学習者特有のビリーフかを選別するには更なる調査が必要で

ある。一方、学習歴について、本調査も他の先行研究と同様、同一のグループを縦断的に見た結果ではない。最初から違うビリーフを持つ可能性も否定できないが、500 を超えたデータ数から考えると可能性は低い。

本調査は台湾の日本語非専攻学習者のビリーフに関する初めての広範囲調査である。冒頭で述べたように、台湾の高等教育機構では日本語非専攻学習者のほうが多い。日本語主専攻学習者と非専攻学習者では、動機も異なり、日本語に費やせる時間も異なる。「どのように非専攻学習者の学習効果を上げればよいか」などの問題に関して、これまでは現場の日本語教師に任せていたが、本調査で得た結果は、教授方法や内容の調整ないし研究の一つの礎になれると思う。今後は更なる分析や、日本語主専攻学習者との比較を行い、日本語非専攻学習者の特徴と傾向をより明確にしたいと考える。

謝辞：調査に協力していただいた先生方、学習者の皆さん、スタッフ、そしてデータ分析のアドバイスをしてくださった陳稚均博士に心より感謝いたします。

付記：本稿は公益財団法人住友財団 2013 年度「アジア諸国における日本関連研究助成」（助成番号：138613）による研究成果の一部である。

注

1. 本稿は公益財団法人住友財団 2013 年度「アジア諸国における日本関連研究助成」（助成番号:138613）による研究成果の一部である。
2. 服部（2002）が言う「賛成派率」とは、五段階尺度の中「強く賛成する」と「賛成する」の割合を足した数値である。そして、賛成派率が 75%を超えた項目を賛成寄り項目と呼ぶ。
3. 盧（2011）は平均値が 2.30 以下の項目を賛成寄りビリーフと呼ぶ。
4. 盧（2011）はクロンバックアルファ値が 0.7 より大きいものを信憑性があるものと述べていて、本稿も同じ基準に準ずる。
5. 回答に意味のある偏りがあるかどうかを確認するため、正規分布と比較した。
6. 賛成派率は「5 ととても賛成」と「4 賛成」の割合を合わせた数値を指している。反対派率は「1 ととても反対」と「2 反対」の割合を合わせた数値を意味している。
7. 今回の調査で反対派率が 75%を超えた項目は「23 正確に使えるまで、日本語を話してはいけない（87.8%）」と

「36 授業でクラスメートと日本語で練習しても意味がない（84.1%）」である。見易さを考慮して、表では賛成派率のみ明示した。反対寄りビリーフはその都度文内で説明する。

8. 板井（1999）の対象は日本語副専攻の学習者で 1 から 3 学年までである。その違いを研究する際、板井は学年差で記してある。

参考文献

- 板井美佐（1997）「言語学習についての中国人学習者の BELIEFS—上海復旦大学のアンケート調査より—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』（12）、63-88.
- 板井美佐（1999）「日本語学習についての中国人学習者の BELIEFS—香港城市大学のアンケート調査から分かったこと—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』（14）、163-179.
- 板井美佐（2000）「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について—香港 4 大学のアンケート調査から—」『日本語教育』（104）、69-78.
- 国際交流基金「2009 年海外日本語教育機関調査」報告
- 関崎博紀（2009）「中国人日本語学習者の言語学習観の調査—中央民族大学外国語学院日語専業の場合—」『つくば大学留学生センター 日本語教育論集』（24）、37-50.
- 高崎三千代（2006）「フィリピン・マニラ首都圏の大学における日本語学習者のビリーフ—歴史的・社会的背景の視点からの考察—」『国際交流基金 日本語教育紀要』（2）、65-80.
- 陳明涓（2014）「非日語主修學習者的日語學習信念調查—以大同大學為例—」『大同大學通識教育年報』（10）179-196.
- 服部美貴（2002）「台湾の日本語学習者の言語学習の「確信」について—台湾大学の学習者の場合—」『東京家政学院筑波女子大学紀要』（6）、169-183.
- 盧錦姫（2011）「台湾の大学生の日本語学習ビリーフに関する調査研究—日本語教育改善のための基礎データ作成を考える—」『東吳外語學報』（32）、77-106.
- 若井誠二・岩澤和宏（2004）「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『日本語国際センター紀要』（14）、123-144.
- 和田衣世（2007）「スリランカの大学生の言語学習ビリーフから日本語教育の改善を考える」『国際交流基金 日本語教育紀要』（3）、13-28.
- Horwitz, E.K. (1987) Surveying Students Beliefs About Language Learning, In Anita Wenden and Joan Rubin (Eds.) *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice-Hall International(UK) Ltd., 119-129.
- ちん めいけん／大同大學 應用外語學系
michia@ttu.edu.tw

The Beliefs of Non-Japanese Major Learners

— Through a Survey Conducted on University Students in Taiwan —

CHEN Ming-jan

Abstract

This research intends to understand the learning beliefs of non-Japanese major Japanese learners who study in Taiwan's universities. Based on the structure of the BALLI questionnaire designed by Horwitz in 1987 with Taiwanese students, the questionnaire of this research concludes seven features of non-Japanese major learners' beliefs. First, they think some limitations on learning language cannot be changed, even though they study hard. Second, they know learning a foreign language is different from other curriculums, and they know they need some unique way to better learn the language. Third, they are optimistic to learning a foreign language regardless of preoccupation in other courses. Fourth, they believe that it is efficient to learn Japanese by audio and repetitive practice. Fifth, they tend to converse as part of their learning objective. Sixth, they like traditional learning methods and think textbooks and periodic tests are necessary. And finally, those who have studied Japanese for over one year place more importance on accuracy. This investigation also finds that during different learning periods, the learning belief of learners is susceptible to change. The outcome is based on the objective investigation using a large variety of data, and could provide guidelines for teachers to improve their language courses.

【Keywords】 non-Japanese major learners, beliefs, learning experience , Taiwanese university students

(Department of Applied Foreign Languages, Tatung University)